

嬉泉の新聞

- ・嬉泉の新聞／第21号／1992年（平成4年）3月発行（年3回発行）
- ・発行所＝社会福祉法人嬉泉・東京都世田谷区船橋 1-30-9（〒156）
TEL 03-3426-2323
- ・発行人＝石井哲夫 ・編集人＝友田篤

自閉と自開の20年

倉光 修

私が初めて「自閉症」と呼ばれた子どもに会ったのは、今からちょうど20年前、私が20歳の時であった。私は大学の1回生で、先輩たちの紹介で、ある病院の「療育活動」にボランティアとして参加することになった。そこに「自閉症」児がいたのである。週1回3時間ほどの集団遊戯療法モドキの活動であったが、私は彼らに魅せられ、突き放され、悩み、疲れ果て、なおも挑んでいった。あのころの情熱が、今の私のアプローチの一つの原点を形作っているように思う。

20年と言えば、先日、福井県の児童相談所と小児療育センターが自閉症児を中心とした合宿を始めて20周年になるので、記念出版のための座談会を行うことになり、私もスーパーバイザーの一人として参加させていただいた。この討論の内容は、山中康裕編『自閉症治療再考（仮題）』の中の1章となる予定である。本書には石井哲夫先生も論文を書いておられるが、私も別の章に「自閉症児のプライセラピー」と題する論文を書かせていただいた。また、これは余談だが、私が所属している大阪大学人間科学部も、今年、創立20周年記念に『人間科学への招待』という本を出すことになり、私は「悩む」という章を書いた。思うに、人間は、ひとつの「周：サイクル」を終えるとき、これまでの経過を振り返り、心を新たに、次のサイクルへと旅立とうとするものようだ。

福井の「自閉症合宿」も20年前には、きわ

めて高密度のエネルギーが渦巻いていたようである。20人の自閉児とその保護者を対象として、2泊3日の合宿を年3回、しかも、当初は一日のプレイセラピーが8時間、その前後の準備やミーティングも含めると、スタッフの実労働時間は1日20時間を越えているという有様であった。当時のスタッフの一人は「合宿が終わると、何日もぼーっとしていた」という。

この合宿を企画した第一の功労者は池上榮一郎という、当時の児童相談所の心理判定課長なのだが、彼らの情熱はなんと、山中康裕、石井哲夫、河合隼雄といった、そうそうたる人物を次々にスーパーバイザーに迎え入れ、この20年間、ほとんど毎年彼らを招聘し続けた。そして、この時空間の中で、まさに奇跡と言ってよいような行動変容や感涙を禁じ得ないような人間関係が形成され続けてきたのである。

座談会の結論は「窮すれば通ず」であった。自閉の厚い壁をはさんで、子どもは窮し、親は窮し、セラピストは窮する。しかし、そこで耐え、なおかつエネルギーを注ぎ込むとき、壁に小さな穴が開き、暖かい光が通じる瞬間が訪れることがあるのだ。

20年という一つのサイクルを終えて、われわれはものごとに限界があることを「自戒」とすると共に、どんな窮地にも可能性が残されていることにも「自開」しなければならないということ、再確認したのである。

（大阪大学人間科学部助教授）

新しい社会福祉政策の展開として、官民揃って口にする地域福祉の強化とはどのような方向を辿っていくことになるのであろうか。今私達が直面している日本の社会が新しい政策の受け入れにくい国になっていくと言ふことを痛切に感じているもの一人として心配をしているのである。私が社会福祉法人嬉泉の常務理事として社会福祉施設を運営しているという立場から言わせて貰えば、地域福祉という幻影を多くの人達が追求している様に思われてならないのである。本来ならば社会の状況を概観して、本当の手のさしのべ方を現実的に工夫することが望まれるわけであるが、誰一人としてそのような考えを述べる人が現れてこないのである。若い人達が自分の住んでいる地域の住民としての自我関与がどの程度進んでいるのかを知らなすぎるのである。若い人達は、自分勝手だからというが、そのような個人の問題ではない。若い人達も一人一人は、よいしすばらしいと思う。しかし社会福祉を身近に行えるシステムの中に住んでいない以上は、地域への参加は、行事中心になり、散発的にならざるを得ないであろう。

例えば私の施設の例をあげても分かることであるが、地域との接触は、殆どないと言つてよい。それなりの努力はしているつもりであるが、地域の人達とは、こちらから押し掛けていく販売活動を通して交流を行うしか手が無い。後はバザーやお祭の時であろう。それでも時折地域の高校生や近くの企業の組合の青年などのボランティアさんが訪問してくださることもある。この程度でなぜ施設福祉から地域福祉へ等という考えがでてくるのであろうか。その前に

施設経営の創造性(その十二) 石井哲夫

本当にいま施設で生活をしている人達と世話をしている人達のそれぞれが苦勞している状況をほっといてよいものであろうか。今や施設は利用者も職員もそれぞれが地域性というか市民性を失いつつあるのでこれこそ何とかしていかなければならぬのである。施設がその地域にサービスを行うという観点ではなく施設に必要な地域生活をどのように展開していけば良いかと言ふことである。人生には、多くの人からの生活的な有効な刺

激や社会的な承認や監視を受ける必要があると思うからである。

どうしてもこの社会には、親無き後の自立またはグループ・ホーム等での生活困難な人達の生活の世話や指導を行う専門的な組織が必要になってくると思うので、とりあえず現在の施設を利用して行かざるを得ないであろう。とすれば今の施設の再生利用法を考えておかなければならないのである。施設の社会化という課題は、実は、施設の再生のためのものであると考えて良いのである。そのために

は、単に施設のおかれてある地域の住民だけを相手にしているだけではなくそのほか施設が活用できる資源を積極的に求めることである。社会福祉施設には、関係している資源を探せばかなり沢山あるはずである。施設の利用者の関係者をはじめとして、職員役員の人脈や出入りの企業関係者に至る広い資源の活用を積極的にやっているものがどのくらい居るものであろうか。ようやくこの頃社会福祉施設経営協議会という組織にお

いて、施設で必要なものを共同購入するようになってきたり、社会福祉協議会が、社会福祉施設の職員を共同で募集する機会を作ってくれるようになってきたことは喜ばしいことと思うがそれ以外にも社会福祉施設自体の努力が極めて乏しいように思うわけである。

社会福祉施設の地域は、何も地理的な地域だけに限定せず柔軟性を持って考えても良いわけであろう。例えば、この嬉泉という社会福祉法人も千葉県袖ヶ浦と東京の2地域にまたがる社会福祉の事業所を抱えているので、その双方の事業所の地域性を相補う事もできるのである。特にこの事業所を利用している利用者の居住地は首都圏にまたがっているものであるから広い範囲の生活情報や人脈が利用できるわけであろう。又職員や役員の人脈も辿ればかなり多くの人達との交流が出来るものである。現に袖ヶ浦のパン販売においては、この人脈が購買層となりつつあると言えよう。いろいろ新しい地域交流を考える転機にしたいと思っている次第である。

☆☆☆☆

私たちの

うぶと

須藤福祉センター各事業所からの報告

袖ヶ浦のびろ学園の近況

☆利用者への直接処遇の立場から

金沢裕子

のびろ学園の近況を紹介するにあたって、この十年余りを、ふと思い返す気になりました。その頃は、今、のびろに

次々と詰め込まれ、我々保母指導員は、日に何度も、トイレの便器をはずし、詰まりを直していたこと等を思い出します。

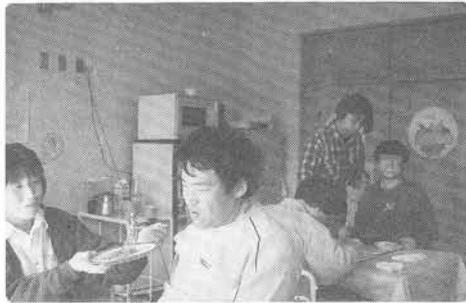


次々と物が壊れる毎日でした。そして、子どもたち一人ひとりの気持ちの動きが読み取れず、悩むことの多い毎日でもありました。その度に、石井先生から「相手の気持ちを尊重して」「自分の身を相手に置き換えて考えてみる様に」という御示唆をよく戴きました。そうした凄まじい、日々

何枚もの衣類を持ち出しては重ね着をしたり、またトイレには玩具やトイレト

戦争の様な頃のことから考えますと、どの子どもたちをみても、随分情緒的に安定し、また人のとこ

ミニケーションの持ち方も随分と成長し、豊かになったものだと感心せざるを得ません。勿論、これは、石井所長始め、山根園長の厳しいスーパージョンがあったことでありましたし、利用者一人ひとりの御家庭の、強力なる御協力がなければ、見い出せなかった方向であると考えています。しかし、一番重要なことは、どの利用者においても、そうした育む力を持ち合わせているのであり、直接関わ



る保母指導員たちが、それを信じて、引き出そうとする姿勢を崩さなかったことだろうと思います。利用者一人ひとりの存在を尊重し、適確に認識していくことは、施設処遇者にとって欠かせない基本的条件であることは言うまでもありません。こうした姿勢が両者のコミュニケーションを確実に深めてきたと言えます。処遇施設利用者の多くは、自分の人生の大半をその中で時間を過ごす事になるわけですから、その場を、家庭に代わる居心地の

あると考えています。そして、生活指導場面や作業指導場面は、利用者が情報を得るための、また自分の存在に気付き自信を得、より自発的になれるための状況設定のひとつと考えているわけです。そして、外側からの押し付けではなく、利用者自身に理解出来るステップをもつて社会化を目指したいと考えますし、その段階にきている今、こうした基本的姿勢をわきまえて、求められる課題に对应していきたいと考えています。

(袖ヶ浦のびろ学園園長代理)

職員の思い

自分を

受けとめて生きる

神保 育子

この仕事に携わって4年が過ぎようとしている。早いような、とうとう5年を迎えるのかと思うと、我ながらやったものだなーと感慨深くなったりもする。

めばえ学園ほのぼの組で3年、こぐま学園で1年の間、関わってきたお子さんたちとの体験を通して実感できたことは、今ある自分に大きな影響を与えている。これまで、気持ちに関わる"ことを心掛けてきて、同時に自分の気持ち

が明確になってきたと感じる。自分を受け入れることが何と大変だったか。相手の気持ちになる"ように育てられた環境の中で、自分の気持ちをあまり意識しないまま過"してきたことに気付いた時は、暫く動揺し受け止め切れなかったが何とか吹っ切られるもので、その後は自分の気持ちを(どんなに勝手なこと)そうと分かかって受け止めようと思えてきた。それ

が2年目辺りだったように思う。自分の気持ちをはっきりしてから、自分の思いと相手の気持ちが区別でき易く、自分勝手な思い上がった関わりに気付くことが増えてきた。そこで常に自分をコントロールしながら、相手に気持ちを傾け、相手の気持ちに添おうとすることの必要性を実感した。

めばえ学園でリーダーと共に動いたり(状況を共にできる)、こぐま学園でスーパービジョンを受けてつくづく思うことは、スーパーバイザーの先生方のお子さんに対するきめ細かさだ。まだまだ自分の甘さを感じているところだがマイペースに自分と付き合ひ、人の気持ちに触れていきたいと思う。(子供の生活研究所こぐま学園指導員)

この仕事に携わって

小川 りえ子

私は、袖ヶ浦のびろ学園に入ってから五年になります。友人からこの話を聞きやってきたのが三十才半ばの頃でした。希望していた仕事で、ラストチャンスとばかりに飛び込んできました。ここのお子さんと出会わせてくれた石井先生

に感謝したい気持ちで一杯です。お子さんは皆ひとりひとりかわいくて関わりを持って過ごしていくうちにその思いも倍増してきます。

今は退園して北海道に行ったAさんは、毎日髪をとかしてリボンを結んでいるうちに、Aさんの方から「リボン」と声を掛けてくれるようになりました。沢山の衣類を着込んだり、まるでバレリーナ

のようにクルクルと目の回るような回転をしたりするAさんと手芸をする事になりました。手先が器用な彼女は何かかシャギー



マットを仕上げてくれましたが、最初は「イヤート」とかん高い声で逃げ出すこともありましたが、戦いながら手芸したことが忘れられない思い出です。でも、Aさんのほうから「手芸」と誘いに来てくれた時のうれしさといったらありませんでした。一枚目完成の時は、万歳をして喜び合いました。

Bさんとは、じっくりおつき合

いを見せてもらいました。ある時は髪をひっぱられ大格闘・ある時はゆっくり公園のベンチでおやつタイム・初めて美容院へ行き目がかくれる程に長く伸びた髪を切り素敵なお嬢さんに変身した彼女の姿が目には焼き付いています。そのBさんが二十才になりました。普段帰宅できないので、学園で形ばかりの成人のお祝いをしました。

お母さまと一緒にカメラにおさまった彼女を見ている自分も、母親の目になっているのに気付きました。いつも感じることが、他の多くの職員の方々に支えられてどうにかやってきているということ。何年たっても未熟なままの私ですが、大好きな仲間たちと一緒に働けることに、とても感謝しています。今は、ひまわり組で失敗を繰り返しながらも、自分なりにあったかい気持ちでお子さんと共に頑張っています。

(袖ヶ浦のびろ学園指導員)

地域に支えられて

地域の人達と一緒に 盛況なもちつき大会

高島平五丁目福祉園

昨年、師走の二十日、折からの晴天に恵まれて、始めてのもちつき大会が、保護者のもとより、地元町会、近所の保育園等各方面の方がたのご協力で盛大に行われました。

何しろ始めての行事なので、利用者も職員も、胸をわくわくさせながらも、内心は不安でした。

前もって本物の立派な臼・杵・蒸し器等を町会の好意で借り、前日にひと臼ついて、あんこ、みそおでんで試食するなどの練習をして準備を整えました。

さて、当日は、幸いすばらしい快晴のもと園舎の内



外での設営に一齐にとりかかった後、午前中は協力してくださる保護者、町会役員や会員の方がた、しろばと保育園の園長さんや保母・父さん、ハッピー姿の可愛い十二人の年長園児たちが続々とつめかけました。

まもなく、園庭でいよいよもちつきを開始。中央におかれた臼を、利用者・保育園児・保護者・町会の方がたが大きな円であみ、保育園児の元気なかけ声の中で、皆んなが次つぎと交替して威勢よくつき続け、全部で六臼(うち三臼は町会からの寄贈米)をつきました。

一方、この間、屋内の模擬店ではおいしいお雑煮・あずき・きな粉・のり・納豆におでん・焼きそばなどが彩とりどりに用意され、皆さんが替わるがわるのお好みメニューを選んで十分な満腹感を味わい

ました。また、テーブルの周囲には、園での日常生活の様子を撮った写真や利用者の作品、嬉泉の他の事業所の紹介パネルなどが飾られ、このイベントのムードをいやがうえにも高めました。

地域の大勢の方々の暖かい善意と快い協力で支えられ、楽しい雰囲気の中で、初のもちつき大会が盛況裡に終わることができました。

この紙上を借りて、改めて、高島町会の皆様はじめ関係各位に心から感謝を申し上げる次第です。(渡辺園長)

千葉興業銀行の 創立イベントに招かれて

昨年12月千葉興業銀行袖ヶ浦支店より創立40周年にあたり、地域と結びついたイベントを行いたいのでぜひ協力いただきたいのお話がありました。

12月2日より一週間作業指導の成果である陶芸作品と機械織りの作品それぞれ数十点をもって展示会の開催とともに、自閉症についての理解をもっといただくためにパネルの掲示やパンフレットの配布を行い、好評を博しました。

次いで12日には数名のお母さん方のご協力を得て、のびろパン・



野菜・タマゴなどの即売会を店頭にて開催、のびろパンの味を知っているというファンの方が結構多く、開店一時間もたたぬうちに売り切れてしまいました。石焼きイモもいつもの倍以上の売れ行きで担当の職員もそれこそホクホク顔でした。

販売は利用者の社会参加に向けた活動ですが、同時に地域の方々に学園の存在や自閉症についての理解をいただく機会として大切なものです。これからも地域に向けた活動に力を入れて行きたいと考えています。

銀行側でもこの種のイベントの継続を希望してくれています。(袖ヶ浦ひかりの学園中塚園長)

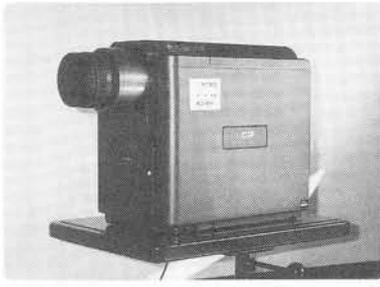
嬉泉の出来事

△ライトエースワゴンの寄付▽



中央競馬社会福祉財団助成
(こぐま学園)

△液晶ビジョンの寄付▽



(社福) 木下財団助成
(袖ヶ浦ひかりの学園)

保護者・ご家族の方々の ご寄付とご協力

私たちの法人と各事業所の学園では、利用者さんの保護者やご家族の方々の有形無形の目に見えないご寄付やご協力を得て、さまざまな運営や処遇の向上に役立させていただいております。その一端をご紹介します、この機会にお礼を申し上げます。

ごく最近では、袖ヶ浦ひかりの学園の荒井さんから「ぜひともテニスコートの建設資金に」と500万円という多額のご寄付をいただきました。職員は歓喜、利用者はどう巻き込もうかというろんな意見が出ています。また、母子入園事業で預かりしている工藤さんからは、各種建物の改修費用にと1000万円という高額のご寄付をいただき、さっそく老朽化した単身寮の改修費用に当てることが出来ました。また、今や袖ヶ浦地域の名物となった「のびろパン」

の大型オープンなひかりの学園の秋山さんのご寄付によるものです。さらにご寄付はのびろ学園の清水さん他毎年多くの方々からお寄せいただいております。

各事業所へのご協力は年間を通して様々で、特に年2回開催されるバザーでは、準備の段階から当日の手伝いまで後援会を挙げてご協力いただいておりますし、さらに地域でガレージセールを開催し売上金のご寄付も頂いております。また、パン工房の手伝いにも定期的においでくださっています。

夏場には、広大な畑と敷地の草刈に大挙して繰り出しておいで下さり、猛暑でうだる日中、精力的に環境の整備をして下さいます。学園内部の環境整備や洗濯室の手伝いにもおいで下さいます。日常我々指導員も気になりながらも手が回らず、おかげで安心して直接処遇に専念できる次第です。

また、中元・歳暮の時期には各事業所宛沢山の品々をお届けくださいます。お名前は挙げきれませんが、それらは職員の会議、来客の接待などに役立たせてもらっております。同時に地域の関係先に折に触れて挨拶回りや学園の紹介をして、地域や関係団体との橋渡しに貢献しております。(友田)

マンション建設

現在、子どもの生活研究所の隣では、今まで駐車場だった敷地に、七階建てのマンションが建設されることになっていきます。

この問題については、設計図が出された当初から、日照権の保障が交渉の中心となっていました。設計図上は、冬季には保育時間中は、園庭部分の日照がかなり遮断されるようになっていました。子どもたちのために日照を守りたいというこちら側の気持ちに対して、施工者側は、理解は示してくれるものの、設計変更を求めるところ側との交渉は平行線のままでした。

その後、交渉は続けられたのですが、2月に入り、隣接地にはみだした形になっている子どもたちの生活研究所の木の枝が落とされ、いよいよ工事が本格的に始まりました。これから約1年半にわたり、マンション建設と隣り合わせの仕事が始まります。この先、どのような問題が起こるかわかりませんが、都市部に存在する施設としては、避けて通ることのできない問題だけに、今後の行方が気にかかるところです。(小池)

ひかりのタイムス

独立第14号

「ひかりのタイムス」は、袖ヶ浦ひかりの学園利用者の山岸が編集長で、友田がアドバイザーをやっています。今回は、前号掲載されたされた文章に対する「寄稿」が届きましたので、掲載しました。

また、今号からは、文章を書ける利用者ばかりではなく、書けない人・あまりうまく喋れない利用者にも、担当の職員が代弁する形で掲載することになりました。より多くの利用者が参加できる紙面作りを目指したいと思うのです。今回は「趣味」や「余暇の過ごし方」を特集してみました。高島平の利用者の文章も掲載致しました。投稿は大歓迎です。ぜひお寄せ下さい。

●寄稿

パン工場の事

池田 万紀子

「先回の櫛橋氏のインタビューについて、第三者的立場より意見を」との原稿依頼を受けペンを取りました。

まずパン工房の様子ですが、火く金曜日まで、午後、販売のある日は、必ずパンを焼きます。午前中に、どんな行事があっても

です。

構成としては、指導員・鈴木Tと期待の新人米津T。助手的立場の深谷・渡辺・櫛橋氏。非常勤として、緒方・池田。ひかりの利用者六名。計十三名の大所帯です。次にパン工房の特徴です。

まず分単位で仕事が進みます。パンの発酵具合に人間の方が合わせる必要があります。

発酵しすぎると、売れないパンが出来上がるので、皆で短時間に成形をし、後は、それぞれの分担で仕事をします。マイペースというよりパンのペース・他人との関係の中での仕事です。

そういう意味でパン工房は、社会と最も近い接点にあると思います。ではこの中で、どの様にしたら、皆が気持ち良く働けるでしょうか。やはり健康第一。体力もですが心の方も重要です。

ストレスを溜めてはいけません。先回のインタビューで『鈴木Tが、ストレスをぶつける。』とありましたが考えようによっては、人間としてはよくある事です。

その場面を見ていないので事実は分かりませんが、確かに鈴木Tはストレスが顔に出る人です。

米津Tが来る前の人手不足を考えると、それもうなづけますが、指導的立場から考えると、なるべく避けたいものです。

「どこでも大変だから」と鈴木Tが言いますが、だからと言って黙っていても問題、良い方向へは行きにくいと思います。

これと同じ事が櫛橋氏にも言えるのではないのでしょうか。

イヤだと思った事をグッと飲み込み、いつまでも覚えてるのは、苦しいものです。

出来るなら相手に直接聞いてみる事です。

案外誤解だったりするものです。どうしても聞けないなら、他の人に相談してみてもどうでしょうか。

か。必ず道は開けてくる物です。

それには、何でも話せる雰囲気を作ることが大事です。それは、鈴木T一人で作るのではなく、皆が自覚して作っていかなければいけないと思います。

社会へ出ていくと言うことは、この様な経験をたくさん積むという事ではないでしょうか。

宿泊訓練

高島平五丁目福祉園

12月12〜13日初めての宿泊訓練で、北区にある身障者スポーツセンターに泊まりました。

3時30分 園をバスに乗って出発しました。

部屋は、4つのグループに別れていて、私の部屋は、布留川晃子さんと、斎藤佳子さんと、安田果さんの4人と、木村先生と渡辺由美子先生のあわせて6人でした。5時から園長先生の話しを皆で聞いて始まります。

『みんなの新聞』が、出来た話で、由美子先生と、福島康弘さんと、私の3人で作ったとお話がありました。

園長先生とみんなと、ジュースでカンパイをしました。お風呂はゆっくり入りました。

夕食も、ゆっくり食べておいしかったです。

13日、朝7時におきました。

8時から公園に散歩に行きました。それから朝ごはんをゆっくり食べて、園に帰ってきました。

元気に楽しく行ってきました。

(この記事は、高島平五丁目福祉園『みんなの新聞』編集長 保田志穂さんの書かれたものです。)

浜園武生君の

インタビュ

＊ 浜園君は喋れないので、担当主任の川相先生が代弁します。

―「書道をやるときは」

川相「書道をやるときは①お母さんが勧めた。②他人の誘いで始めた。どちらですか」

浜園「ウン」とうなずき①を指す。

―「書道をやるときは」

川相「書道をやるときは①楽しいですか②つまらないですか。どちらですか」

浜園「ウン」とうなずき①を指す。

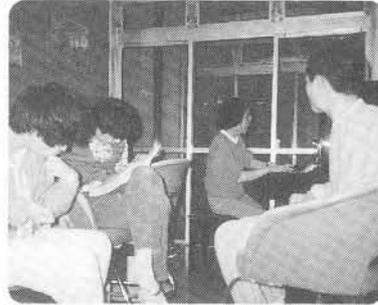
―「書道と陶芸どちらが好き」

川相「浜園君は書道と陶芸どちらが好きですか」と聞く。

浜園君は指で書道の字の方を指す。

―「夏休み・春休み・冬休みにも、書道はしますか」

川相「夏休み・春休み・冬休みに



飯田さんのピアノ演奏

も、書道はしますか。」と浜園君に聞く。川相先生代弁する。

川相「してない。するのは、お正月の書き初めの時です。」

―「いつごろから、書道をやりましたか」

川相「いつごろから、書道をやりましたか①小学生②中学生どちらですか」

浜園「ウン」とうなずき①を指す。

―「どこで書道習ったの」

川相「どこで書道習ったの①家②塾どちらですか」

浜園「ウン」とうなずき①を指す。

川相「学校でしなかった。自宅でやっています」

―「なぜ学園でしないのですか」

川相「習字をやる機会がないから」

―「なぜ正月のみ書道をするのですか」

川相「やる機会が少ないから、やる機会があればする。日記を良く書く。」

―「さきがけの人の余暇の過ごし方は」

川相「電車で両親と一緒に外出するひが多い。」

(袖ヶ浦ひかりの学園利用者)

小原是運君の

インタビュ

―「青年教室に、入会したの？」

小原「お母さんが紹介してくれたから」

―「お母さんと一緒にそこに通ってるの？」

小原「ひとり」

―「青年教室どこにあるの？」

小原「中野区の公民館」

―「何年前から、そこに通ってるの？」

小原「最近入会した。」

―「いつまで楽しい。」

小原「楽しい。」

―「どういう事してるの？」

小原「陶芸」

―「小原君も作ってるの？」

小原「ウン」

―「月何回か通っていますか」

小原「ウン」

―「小原君はスキーが上手と聞いてますがレクリエーションやるの？」

小原「夏休みに山登りをした。」

―「教室の先生や、お友達と話しをする事もある。」

小原「ない。」

―「あんまり人と話さなくても寂しくない。」

小原「寂しくない。」

―「小原君は冬休み・春休み・夏休みうちで何をしています。」

小原「たまに映画館に行く。」

―「どういう映画を見ますか。」

小原「寅さんを正月に見た。テレビで宣伝する映画は見る。」

―「日曜日何をしていますか。」

小原「お散歩たまにする。」

(袖ヶ浦ひかりの学園利用者)



生け花のお稽古 (小原君)